クラッシックにこだわる。キッズな喜びに満ちたミニ・クーパー。

メインテナンス道具を広げるだけでご機嫌のこの笑顔。「この人ワックスだけで年間どれだけ使うか」「いつも車ピカピカっスよね」と小野さんと後藤くん。

生まれた年に発表された車。ミニ・クーパーに寄せるこだわりは相当。

とにかく長く時を経てきたクラッシックなものがお好みなのがこの人だ。その上これと思えばとことんなのは、オタクなまでの眼鏡へのこだわりで周知のことだが、今その思いを思いきり投入させているのが車、「生まれた年に発表されたローバー・ミニ・クーパー」である。忙しないモデル・チェンジなどせず、「それでも変わらずに愛され続けている」ところがその魅力と言うが、やはりその愛し方に中途半端なところはなく、ホイールのインチダウンは当然クラブマンレーサー風に仕上げたエンジンルームなどチューン無数。満面の笑顔でボンネットを開けるその顔は、キッズの喜びに満ちている。

PROFILE

北山の眼鏡屋ポウスト・オブ・グラッシィーズの竹中太一氏。このところはカジュアルが多い彼、ハワイ製のアロハなアロハも愛用。

モーリス、オースチンなどの系図をたどって今はローバーから発売されているミニ。竹中さんがこよなく愛するのはドライビングの体感をダイレクトに味わえるクーパー。より走りのスピードを楽しむためエアコン外すのは当たり前、ハイローキットで車高を下げ、エンジン・ルームに凝ったクラブマンレーサー仕立て。「ミニはな、夕方くらいの色が一番ええねん」とほれぼれ。

走りを楽しむため20万円もするイタリア製ウェバーのキャブレターに、フルトランジスター・キット搭載のクラッシックにチューンされたエンジン・ルーム内。

チューンを依頼するのはミニだけを扱うショップ、ガレージ・ペガサス。

今店で一番お気に入りの「手放したくない眼鏡」、アングロ・アメリカン・アイウェア¥18、000。クレージュ・竹中の異名を取る竹中さんのカラーリングはこんな感じ。

靴に関しても相当ウルサイ竹中さん。「これは10年くらい前シンガポールで¥45、000くらいやったかな。色は茶系が多い。」イタリア製のストレート・チップ。

大事箱から出していただいた上は白金によるボストンの原型、下は縁なしの原型。右はセルとワイヤーテンプルのコンビネーションの原型。「今では到底作れない」と嘆息のデッドストック。

ミニ・フリークやミニ・マグなどバックナンバーもしっかり有する。中でもお気に入りはこの本。「モーリスのクーパーの35才のバースディ特集やねんけどお誕生日祝ってもらえる車て他にある？」

ミニに関するビデオ。「メンテナンスとヒストリーと」「これは？」「これはずーっとミニが走ってるヤツ。」「それだけ？」「そうやけど？」

取材・文／端井由紀子★写真／武甕育子